

— 所蔵資料紹介 —

阿波の国絵図および国境図 Part II

— 平成6年2月1日～4月24日 —

— 展示にあたって —

— 徳島県立文書館長 大和 武生 —

徳島県立文書館では「切れ目のない展示」を設立以来続けております。展示は、比較的長期の準備を要する「企画展」と、保管する資料の紹介を主要な目的とする「資料紹介」展の二系統で実施しております。

今回は資料紹介展であり、絵図展としては「阿波の絵図 Part I」（平成3年度）に続くものであります。

本館では、国立史料館及び徳島大学図書館が所有する絵図を中心に、約110点の絵図の複製を作成しております。複製の作成は、多くの県民の方がたの閲覧を容易にすることと、直に閲覧することによる損傷から現資料を守るためであります。

本館では、原資料の収集とともに、今後とも複製による絵図の収集を増やし、順次紹介していきたいと考えております。

今回の展示に当たり、大変なご協力をお願いいたしました徳島大学総合科学部の平井松午先生に対して心からお礼を申し上げます。

— 展示国絵図解説 —

— 平井 松午（徳島大学総合科学部助教授） —

徳島県立文書館では、近世の絵図を計画的に収集しています。今回はこのうち、国立史料館と徳島大学附属図書館に所蔵されている国絵図ならびに国境図を中心に紹介します（いずれも複製版）。

国絵図は、慶長10年（1606）、正保元年（1644）、元禄10年（1697）、天保6年（1835）に、幕府が各大名に命じて調進させたもので、寛永年間（1624～44）にも幕府巡見使を通じて幕府に献上されたといわれています。幕府が直接作成した天保国絵図を除いては、幕府に提出された国絵図の多くは失われていますが、諸藩は控図や下図を所蔵し、今日に伝えられています。

今回展示している国絵図もそうした控図・下図類で、その多くは作成年代が不明でしたが、関連史料ならびに絵図の仕立様式・記載内容（図面の形状や構成、縮尺、村形・郡界線・一里山・城下など）の検討によって、作成時期が推定できるものもあります。なお、解説の図番号は添付資料の表1・2と一致します。

図1 阿波淡路両国絵図〔阿波国〕（国立史料館所蔵、所蔵番号:1197-4）

本図は、徳島大学附属図書館に所蔵されている「阿波国大絵図（所蔵番号：徳1）」と同一図である。作成年は不明であるが、①寛文4年（1664）に阿波国10郡に再編される以前の13郡が示されている、②徳島城下の福島地区がまだ「地き連」と表現され、安宅島が現在の常三島に位置している、③阿波九城のうち、「撫養」「わき」「大西（池田）」「一宮」「富岡」「わしき」「とも」の7城が、ほかの村名を表記した小判型の村形と異なる丸型で表現されている、④「里の海士」といった中世荘園名の名残がみられる、⑤海岸線や国境の形状が稚拙、などの点から、近世初期の慶長国絵図ではないかと推定される。

図2 阿波淡路両国絵図〔阿波国〕（国立史料館所蔵、所蔵番号:1197-2）

本図の収納袋には「忠英様御代」と表記されているので、二代藩主忠英の治世期（1620～52年）に作成されたと推定される。記載内容には次のような特徴がみられる。①13郡仕立て、②阿波九城の多くが「古城」と表記されている、③徳島城下の福島地区が依然「地切村」と表記されている、④本図以降、淡路国絵図と一対で残されている、⑤対となる淡路国絵図では、まだ洲本城下が表記されていない。幕府は寛永9年（1632）の巡見使の派遣後、巡見使を通じて各藩に国絵図の上納を命じているが、本図がその提出図に該当するとも考えられる。

図3 阿波国大絵図（徳島大学附属図書館所蔵、所蔵番号:徳3）

本図も作成年代は不明であるが、以下の記載内容から、寛永15年（1639）に幕府が再度徴収した国絵図と推定される。①街道筋への一里山（一里塚）の表記、「舟渡り」や葛橋、河口・湾口などの交通注記の初出、②図面構成が一定固定式で、村形が短冊型で示されるといった他国との仕立様式の不統一、③常三島から移転した安宅の舟倉が描かれている、などである。なお、『阿淡年表秘録』の寛永18年の項には、「公儀御用ニ付 御国絵図且御城下之図郷村帳……御指出」と記されている。

図4 阿波淡路両国絵図〔阿波国〕（国立史料館所蔵、所蔵番号:1196-2）

展示国絵図類で唯一、「正保三年十二月朔日」と作成年が明らかな正保国絵図である。幕府は正保国絵図作製にあたって、道筋縮尺6寸1里や郡分け、一里山

(一里塚)、村高の記載、航路・渡河方法・河幅・水深や峠の牛馬通行といった交通注記などについて、初めて絵図仕立様の基準を設けた。本図は下図のため彩色されていないが、凡例には村形を郡別に色分けするための色が指定されていて、絵図の仕立様式は幕府の基準に合致する。

図5 御兩國之絵図[阿波国] (国立史料館所蔵、所蔵番号:1198-1)

本図の袋表書きには「綱通様御代 年曆不知」と記されていて、四代藩主綱通の治世期(1666~1676)の作成と考えられる。本図は縮尺率が異なるほかに、10郡仕立てとなっているために村形の郡別色分けが異なる以外は、その記載内容が図4の正保国絵図(13郡仕立て)とほぼ同じである。幕府は寛文年間(1661~73)に、明暦3年(1657)の大火で焼失した正保国絵図の再提出を命じており、本図はその再提出図と推定される。その際、阿波国はすでに寛文4年(1664)には10郡に再編されていたため、本図は10郡仕立てになったものと考えられる。

図6 阿波国御国図[板野郡] (国立史料館所蔵、所蔵番号:1200)

本図は阿波国10郡を7鋪に分けた郡別切図のうちの1枚である。これら一連の切図の記載内容は、基本的には正保国絵図(図4)を踏襲している。ただし、これらの切図には多くの懸紙が貼られている。懸紙の内容は正保国絵図に示された村の地理的位置ならびに正保2年以降の新村(新田集落)についての修正指示である。新村については「此村正保二年以後新村ニテ御座候」と記されているほかに、「原田村元禄元年ヨリ吉田村ニテ御座候」と修正指示された旧村もある。

幕府は元禄10年(1697)2月に、絵図元大名に元禄国絵図(図8)の改訂を命ずるが、本図をはじめとする一連の切図は、元禄国絵図改訂のために用いられた正保国絵図を基図とする改訂作業図であったと考えられる。

図7 讃岐伊予土佐国端絵図並裁廻絵図 (国立史料館所蔵、所蔵番号:1212)

本図は、元禄国絵図作成にあたって、阿波国と隣接する讃岐・伊予・土佐の3国との国境を確定するために、関係諸藩から徳島藩に提出された国境絵図で、いずれも元禄13年(1700)の4月および7月に徳島藩に提出されている。なお、徳島藩は同年8月に阿波国絵図を幕府に献上している。

図8 阿波国大絵図 (徳島大学附属図書館所蔵、所蔵番号:徳2)

本図は、紙(絵図余白)部分に郡色分けや郡高目録などを書き入れる枠を設けているものの記載がなく、またそれゆえ、本図の作成年代は不明とされてきた。しかし、①本図が6寸1里の縮尺で描かれ、②図6で指示された旧村の変地(村形の図上の位置変更)ならびに新村がほぼそのまま踏襲されていること、また、③図7の国境絵図に記された国境ならびに交通路に関する小書(注記)がほぼ一致していることから、元禄国絵図の下図と推定される。隣国との国境を調整したことによって、正保国絵図と比較して、本図にみられる阿波国の形状描写はかなり進歩している。

図9 阿波国画図 (国立史料館所蔵、所蔵番号:1202)

これまでの図がいわゆる幕撰国絵図であったのに対して、本図はこれらの国絵図と仕立様式をまったく異にしている。山地は淡黄色で塗りつぶされて、国絵図に特有の俯瞰描写はみられなくなった。また、村形もなくなり村(藩政村)の範囲が境界線で区画され、阿波国の形状もこれまでの国絵図よりも改善されている。しかしながら、国境の表記は国絵図のものが踏襲されている。こうした意味で、本図は絵図(見取図)→地図(実測図)への移行過程にある近世後期の阿波国図といえる。

図10 阿波国全図 (徳島県立図書館所蔵、所蔵番号:W291・3アワ)

本図は、「明治3年(1870)上梓」と年紀の入った8厘1町(約1/45,400)に縮尺された阿波国図である。本図は木版印刷図で、徳島県立博物館や洲本市立淡路文化資料館などにも所蔵されている。本図の最大の特徴は、実測に基づく分間絵図(縮尺地図)であり、極めて精巧に作製されていることである。

徳島藩では、享和2年(1802)に藩の測量方であった岡崎家が国絵図の作製を命ぜられ、規矩術(西洋流測量術)を用いて天保2年(1831)に阿波国絵図を、弘化4年(1847)には同じく淡路国絵図を完成させており、本図はそうした岡崎系統図の流れを汲むものといえる。本図も山地を淡黄色、平地を白地で平面的に表現し、村境を描き入れているなど、図9との共通点も多い。